

資料 精神看護学実習における看護学生の体験と学び

著者	田村 裕子, 児玉 豊彦, 小森 照久
雑誌名	三重看護学誌
巻	18
号	1
ページ	23-30
発行年	2016-03-15
その他のタイトル	Experience and learning of nursing students in psychiatric nursing practice
URL	http://hdl.handle.net/10076/15067

精神看護学実習における看護学生の体験と学び

田村 裕子, 児玉 豊彦, 小森 照久

Experience and learning of nursing students in psychiatric nursing practice

Yuko TAMURA, Toyohiko KODAMA and Teruhisa KOMORI

Abstract

【Objectives】

This study aimed to clarify nursing students' experience and learning during psychiatric nursing practice.

【Method】

Prior to the present study, we obtained approval from the ethical review board of the graduate school of medicine and faculty of medicine of Mie University. Of the nursing students who received training at the neuropsychiatry ward in the University hospital, from September 29, 2014 to February 6, 2015, 28 consented to participate in the study. Using content analysis, we analyzed the minutes (records) of a meeting reflecting the student' experience and learning from the training.

【Results】

Based on the minutes (records) of a meeting reflecting the student' experience and learning from the training, we made a total of 250 records regarding their learning. These records were assigned to 31 subcategories, which were then subjected to abstraction, and divided into the following 9 categories concerning their experience, and learning from the training: the 1) difficulty of dealing with psychiatric patients, 2) understanding patients through patient-student interaction, 3) necessity of providing nursing care while respecting patients' wishes, 4) importance of self-insight, 5) development of favorable relationships, 6) levels of achievement in training and relevant issues, 7) understanding patients through patient-nurse interaction, 8) understanding treatment and patients' lives, and 9) the ways in which nurses work in psychiatric nursing.

【Conclusion】

Nursing student's experience and learning were variously caused by interaction with nurses and psychiatric patients during psychiatric nursing training.

Key Words: Psychiatric Nursing Practice, experience, learning

I. はじめに

A 大学看護学科では3年生時の領域別実習において精神看護学実習を行っている。ほとんどの学生は、この実習において初めて精神疾患患者を受け持ち、看護

を展開し、患者との関わりを通じて患者理解を深めている。また、実習期間中には精神看護学実習での体験や学びを共有するカンファレンスを行っており、研究者は、学生の学びの変化や成長の記録としてカンファレンスの発言内容を記録していた。学生が精神看護学

を十分学ぶためには、患者と本当に「関わりあう」体験が不可欠であり、精神看護学実習においてカンファレンスは、それぞれ自分の考えを提供しあうことで、1つの事柄でもさまざまな見方ができることを学ぶ場となっている(武井, 1997)。実際にカンファレンスは、患者との実際の関りの中で、学生が得た体験を幅広い視点でとらえ、学びを深める場となっていた。

学生がカンファレンスで自分の経験を言語化して他者に伝えることや、他者の経験を共有することは、受持ち患者の特徴によって学習内容が異なるため、1人の学生が体験した現象を、他の学生に伝達し学びを共有することができる。また、他学生の体験を聴くことで精神科看護に興味を持ち自己学習につながりより深く考察することや、実習での経験や学びがより印象深く心に残ることも期待できる。さらに、体験を伝える学生も、わかりやすく人に伝える訓練となる(和泉ら, 2013)。

しかし、先行研究において、実習終了後の感想文やレポートからの学生の学びの分析は報告されているが(入澤ら, 2003; 高橋ら, 2005)、カンファレンスで共有された体験や学びを分析した研究は少ない。カンファレンスは、学生が体験や情報を共有する事ができ、自己や他者の経験や学びを共有していく場となっているため(西島, 2008)、それらを記録したカンファレンス記録を分析することには意義があり、実習での学びをより深められるような実習展開や指導につなげることができると考えた。

II. 目的

本研究の目的は、精神看護学実習における学生の体験や学びを明らかにすることである。

III. 研究方法

(1) 実習目的・目標

A 大学看護学科の精神看護学実習の目的は、「精神看護学の知識と技術を活用し、自己洞察と対象の理解を深め、医療および家族を含む心理社会的環境の中で、精神保健看護援助を実践する能力を養う」ことである。また、実習目標としては、1) 精神疾患患者への看護援助を通して、精神の健康問題が生活に及ぼす影響を理解する、2) 看護学の基礎知識に基づいた看護過程を展開する、3) 治療環境および社会心理的環境がもつ治療的意義を理解する、4) 精神科における薬物療法、各種療法の実践を学び、精神科治療の特徴を理解する、5) 看護実践に活用するための自己洞察を深める、6) 地域

精神保健活動における他職種による社会復帰援助活動を理解する、という6点を挙げている。

(2) 実習方法

精神看護学実習を行う3年生の学生は8グループに分かれ、実習期間は2週間とし、1グループは9~10人の構成であった。ただし、精神看護学実習における病棟実習では2施設に分かれて実習を行った。研究者が指導を行った学生は、A 大学医学部附属病院(病床数30床)の精神・神経科病棟にて実習を行った各グループ4名であった。学生は、原則として1名の患者を受け持った。病棟実習終了後の2週目の水曜日には社会復帰施設の理解を目的に他施設の就労支援B型作業所、精神科デイケアにて半日ずつ実習を行った。指導は、臨床指導者と教員3名で担当し、教員は臨床指導者との調整を図りながら学生指導を行った。病棟実習終了日と精神看護学実習最終日以外の実習終了時には、毎日ミニカンファレンスを行った。

(3) カンファレンス方法

今回対象としたカンファレンス記録は精神看護学実習での体験と学びを共有したカンファレンス記録である。カンファレンステーマは体験と学びというテーマを扱った点で8グループは同じであった。対象にした学びの共有のカンファレンスは、病棟実習終了日と、精神看護学実習最終日に実施しており、各30分程度であった。学生によるカンファレンス終了後には、教員から、より理解を深めるように助言を加えていた。

(4) 分析の対象

対象は2014年9月29日~2015年2月6日の精神看護学実習中に行われた16回分のカンファレンスの記録である。研究者が実習指導にあたり、カンファレンスに出席していたのは32名であった。しかし、研究協力に同意が得られたのは28名(87.5%)であった。同意が得られなかった4名についてはカンファレンス記録の中から発言内容を削除した。

カンファレンス内容は教員が学生の発言をカンファレンス記録としてカンファレンスと同時進行でパソコンに記録しており、それをデータとして扱った。

(5) データ分析方法

分析は、精神看護学実習における体験と学びに関する内容分析を行った(舟島, 1999)。

分析の手順は、記録内容の句点から句点までの1文章を記録単位とした。その際、1記録単位中に「体験」「学び」の記述が複数含まれるものに関しては、意味の

あるまとまりをデータとした。また、記録内容は、記録単位の大小に関わらず全てを分析の対象とした。

次に、これらを精読して、精神看護学実習における体験と学びに関する記述を抽出した。記録単位は全てデータとし、意味内容が捉えにくい記述については前後の文脈から解釈した。そして、記録単位を意味内容の類似性に従い分類し、内容の共通性から「サブカテゴリ」を形成した。さらに内容の抽象度を増すため、同様の作業を繰り返し、最終的に「コアカテゴリ」として内容の主題を命名した。そして、カテゴリ化された各項目の記録単位の出現頻度を記述した。

なお、分類に当たっては、実習指導者間で検討した。

(6) 倫理的配慮

本研究は三重大学大学院医学系研究科・医学部研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。学生には、対象学生が受講する授業時間に同意説明文書と口頭で説明し同意書にて意思を確認した。説明内容は、カンファレンス記録の分析において学生個人を特定することはなくデータは研究以外には使用しないこと、研究への参加は自由意思に基づくものであり開始時及び途中でデータの使用を拒否しても何ら不利益を生じないこと、研究参加の有無は成績評価や人物評価とは一切関係ないことであった。カンファレンス記録のデータは、連結可能匿名化とし、情報管理者が管理した。同意を得られなかった学生については情報管理者がデータを削除したことを確認し研究に着手した。

IV. 結果

1. 受け持ち患者の特徴

学生 28 人の受け持ち患者疾患別一覧を表 1 に示す。受け持ち患者の選定では、感染症や合併症、過去の衝動行為、性的言動などの有無を考慮した。受け持ち患者の疾患はうつ病が 25.0%、統合失調症が 21.4%、双極性障害が 21.4%の割合を占めた。

2. 精神看護学実習における学生の体験と学び

以下の記述について、コアカテゴリは《 》、カテゴリは〈 〉、サブカテゴリは【 】、記録単位は（ ）、生データは『 』、で表記する。

カンファレンス記録から学生の精神看護学実習中の学びや体験に関し記録単位は 250 であった。記録単位を意味内容の類似性に従い分類し、内容の共通性から 31 のサブカテゴリを形成した。さらに内容の抽象度を増すため、同様の作業を行い、9つのカテゴリを形成し、最終的に 2つのコアカテゴリとして内容の主題を

命名した。そして、各項目の記録単位の出現頻度を記述した。

1) 精神看護学実習における学生の体験と学び

学生は精神看護学実習において、《学生自身の内面の変化や実習達成度を含めた体験からの学び》として、〈精神科患者との関わりでの困難さ〉を感じていたが、患者との実際の関わりを通して〈患者－看護学生間の実際の関わりを通じた患者理解〉を学んでいた。このように患者を理解することは、〈患者の意思を尊重した看護展開の必要性〉に繋がり、自らの看護介入やコミュニケーションの傾向を振り返ることで〈自己洞察の重要性〉に気づくことができ、〈関係の構築と発展〉に繋がっていた。しかし、短い実習期間の中では解決できない事柄もあり、学生は〈実習達成度と今後の課題〉としてとらえ、関りの困難さを乗り越える成功体験ばかりでなく、〈精神科患者との関わりでの困難さ〉もなお、今後の課題として認識していた。

《看護師や他学生からの助言や患者を取り巻く治療環境から気付いた学び》として、患者ばかりでなく、患者を取り巻く〈患者－看護師関係を通じた患者理解〉、〈治療・生活の場の理解〉、〈精神看護における看護師の在り方〉の学びを得ており、患者－学生間の関りだけではなく患者を取り巻く治療環境を理解する必要があることを学んでいた。

以上より、精神看護学実習における看護学生の体験と学びは、《学生自身の内面の変化や実習達成度を含めた体験からの学び》と、《看護師や他学生からの助言や患者を取り巻く治療環境から気付いた学び》であった。

3. コアカテゴリの内容、記録単位数について（表 2）

1) 《学生自身の内面の変化や実習達成度を含めた体験からの学び》について（198）

この学習内容の記録単位は 198 であり、〈精神科患者

表 1 学生 28 人の受け持ち患者疾患別一覧

受け持ち患者の疾患名	学生人数 (%)
うつ病	7 (25.0)
統合失調症	6 (21.4)
双極性障害	6 (21.4)
非定型精神病	5 (17.9)
感情性統合失調症	2 (7.1)
てんかん精神病	1 (3.6)
強迫性障害	1 (3.6)

* 28 人全員女子学生

表2 精神看護学実習における看護学生の体験と学び

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ	記録単位数	
学生自身の内面の変化 や実習達成度を含めた 体験からの学び	精神科患者との関わり の困難さ	関係構築の困難さ	25	
		他科患者対応との違いに関する困惑	2	
		実習前からの精神科患者対応への困難さの不安	1	
	患者－看護学生間の 実際の関りを通じた 患者理解	患者の立場に立ったコミュニケーションスキルの実行	29	
		客観的情報から患者情報をとらえ対応を考える必要性	18	
		疾患についての基礎知識と患者の基礎情報の理解	12	
		患者の力・成長を信じた関わり	10	
		実習初期と比較した患者に対するイメージの変化	9	
		病気だけではなく患者そのものの理解	6	
		患者同士の関わりへの尊重	2	
	患者の意思を尊重し た看護展開の必要性	患者の意思を尊重した看護実践の必要性	7	
		患者の生活背景や病気を理解した上での看護展開の必要性	6	
	自己洞察の重要性	自らの傾向を振り返る必要性	11	
		振り返りを意識した日々の看護実践の必要性	1	
	関係の構築と発展	関係構築のための学生からのアプローチ	25	
		関係構築を確認できる患者からの反応	8	
		関係構築から得られた発展	6	
	実習達成度と今後の 課題	達成感	11	
		不全感	5	
		次につながる実習展開	4	
	患者－看護師関係を 通じた患者理解	精神科特有の患者への対応	8	
		患者への見えない配慮と注意	3	
	看護師や他学生からの 助言や患者を取り巻く 治療環境から気付いた 学び	治療・生活の場の理 解	特殊性のある病棟であるが患者にとっては治療の場であり生活の場である理解	9
			社会復帰や退院後の生活を見据えた関わり	7
			長期的な治療への関わり	5
意味のある病棟スケジュール、プログラムの理解			3	
社会復帰施設の理解		1		
精神看護における看 護師の在り方		患者への対応や、学生への助言からの学び	7	
		カンファレンスを通しての問題解決	6	
	理想の看護師像	2		
		他学生との助け合いの必要性	1	

との関わりでの困難さ〉(25)、〈患者－看護学生間の実際の関りを通じた患者理解〉(86)、〈患者の意思を尊重した看護展開の必要性〉(13)、〈自己洞察の重要性〉(12)、〈関係の構築と発展〉(39)、〈実習達成度と今後の課題〉

(20) の6つのカテゴリの構成となった。

〈精神科患者との関わりでの困難さ〉(25) の中のサブカテゴリには【関係構築の困難さ】(25) の単位数が最も多く、『患者さんの思いを心理的・精神的に全体的に

みて接することは難しいと感じた。』、『日によって話すことができなかつたりする患者さんの対応に戸惑った。』などの記録内容であった。【他科患者対応との違いに関する困惑】(2)、【実習前からの精神科患者対応への困難さの不安】(1)については記録数が少なかった。

〈患者－看護学生間の実際の関りを通じた患者理解〉(86)の中のサブカテゴリには【患者の立場に立ったコミュニケーションスキルの実行】(29)の単位数が最も多く、『精神科の患者さんは沈黙の間に考えていることが多いと感じた。沈黙の後に話すことが多い。』、『時間につけたり近づきすぎないように距離の取り方を意識した。』などの記録内容であった。

〈患者の意思を尊重した看護展開の必要性〉(13)の中のサブカテゴリは、【患者の意思を尊重した看護実践の必要性】(7)【患者の生活背景や病気を理解した上での看護展開の必要性】(6)の構成となった。【患者の意思を尊重した看護実践の必要性】では、『患者さんがどうありたいのか、どうい生活をしたのかを聞いていけないといけない。』、『気分の変動の中でも自分の看護計画ばかりでなく、患者さんのペースに合わせて関りを持つ。』などの記録内容であった。【患者の生活背景や病気を理解した上での看護展開の必要性】では、『患者さんの生活パターンについてよく理解し、患者さんにとってどのような看護や介入が必要か考えていくことが必要であった。』、『患者さんの生活が原点であること、患者さんの生活や病気の認識、世界がどのようなものであるのか、患者さんがどうなりたいか知った上でケアを考えていけないといけないと感じた。』などの記録内容であった。

〈自己洞察の重要性〉(12)の中のサブカテゴリには、【自らの傾向を振り返る必要性】(11)の単位数が最も多く、『患者さんと関わっていく中でケアを実施しようという気持ち、評価をしないといけないと自分の気持ちを優先してしまっていた。』、『自分主体で、積極的に関わっていたが、患者さんの価値観、患者さん主体に考えることが必要であると感じた。』などの記録内容であった。

〈関係の構築と発展〉(39)の中のサブカテゴリには、【関係構築のための学生からのアプローチ】(25)の単位数が最も多く、『活動に興味をもてるように、好きなことを聞いたり、塗り絵や折り紙といった患者さんの意思を確認してやりたいことを行っていった。』、『出来ていることを維持できることは大切であり、それを患者さんに伝えるためにできていることがすごいこと、今後も続けてほしいことを伝えた。』などの記録内容であった。

〈実習達成度と今後の課題〉(20)の中のサブカテゴ

リには、【達成感】(11)と【不全感】(5)という対極のサブカテゴリが存在した。【達成感】では、『全体像が分かりにくい患者さんであったが話をする中で自分の思考を整理できた。患者さんの理解を深めることができた。』、『不全感』では、『患者さんに気を遣わせてしまったかもしれないし良好な関係を築けたかは分からない。』などの記録内容であった。

2) <<看護師や他学生からの助言や患者を取り巻く治療環境から気付いた学び>>について(52)

この学習内容の記録単位は52であり、〈患者－看護師関係を通じた患者理解〉(11)、〈治療・生活の場の理解〉(20)、〈精神看護における看護師の在り方〉(28)の3つのサブカテゴリの構成となった。

〈患者－看護師関係を通じた患者理解〉(11)の中のサブカテゴリには、【精神科特有の患者への対応】(8)の単位数が最も多く、『患者さんに対する看護師さんの関りも寄り添うこと、聞くことを大切にされており様子を見ながらの接し方がすごいと思った。』などの記録内容であった。

〈治療・生活の場の理解〉(20)の中のサブカテゴリには、【特殊性のある病棟であるが患者にとっては治療の場であり生活の場である理解】(9)の単位数が最も多く、『精神科のイメージは閉鎖されているイメージだった。実際はあわただしくなく、治療の場であるが、休息を大事にされた生活の場でもあった。』、『患者さんが自傷行為をしようとした場面があった。患者さんを守るために精神科特有の気を付けないといけないことがあると感じた。』などの記録内容であった。カンファレンスは精神看護学実習での体験と学びとしていたが、【社会復帰施設の理解】(1)についての記録数は少なかった。

〈精神看護における看護師の在り方〉(28)の中のサブカテゴリには、【患者への対応や、学生への助言からの学び】(7)、【カンファレンスを通しての問題解決】(6)の単位数が多かった。【患者への対応や、学生への助言からの学び】では、『看護師さんに相談したり、医師のカルテからも情報収集し、患者に寄り添って幻覚への対策を考えていくことが大切。』、『いろんな患者さんを受け持った人の意見が聞けて、症状がありながらも生活することができるかなどの視点が大事であることを学んだ。』、【カンファレンスを通しての問題解決】では、『学生の疑問点についてはカンファレンスで議題にしどのように考えたらいいか、関わったらよいかと共に考えることができた。』、『カンファレンスで話した内容をケアに生かしていくことができカンファレンスを生かしていくことの大切さを学んだ。』などの記録内容であった。

V. 考察

学生は、実習前には精神科患者対応に対して少なからず不安を抱えており、当初は他科患者と対応の違いに困惑し〈精神科患者との関わりの困難さ〉を感じていた。【他科患者対応との違いに関する困惑】や【実習前からの精神科患者対応への困難さの不安】の記録内容が少なかったのは、実習前後の思いや他科との比較を焦点とした体験の共有ではなかったためであると思われる。しかし、学生は、〈患者—看護学生間の実際の関りを通じた患者理解〉に関して、患者との実際の関りを通じて患者の健康的側面やその人自身を理解し、患者の力や成長を信じた関わりを持つことが大切であることに気づき、学びと捉えていた。入澤ら（2003）は、学生が患者—看護師の相互作用に参加することで実践を通じた患者理解となると述べている。学生は、看護を展開していくためにもまずは、実際に精神障害者に関わることで、現実的な看護を模索し、その人らしい生活ができるように患者を理解することが必要であると学んでいた。

さらに、〈患者の意思を尊重した看護展開の必要性〉という学びから、自らの看護介入やコミュニケーションの傾向を振り返ることで〈自己洞察の重要性〉に気づき、それを行うことで患者との〈関係の構築と発展〉に繋がるという学びを得ていたと考えられた。福山ら（2004）は、患者が自分らしい生活を送るためには、自尊心やセルフケア能力を高められるための援助に関して学ぶことが重要であると述べている。学生は実習の中で、問題志向型の看護過程の展開では対象者が病気であるということだけを捉えがちになる。しかし、患者を病気と共に生活していく生活者として捉えることが必要であり、自分主体で看護計画やコミュニケーションを行うのではなく、患者の意思を尊重した看護を展開すること、そのためには自らの傾向を振り返った上で患者へのアプローチを行うことが必要であることに気付いており、このような関りができたからこそ、患者からも良い反応が得られ関係の構築に繋げることができていたと考えられる。しかし、自己洞察について高橋ら（2005）は、看護学生が患者にとって治療的存在となるための自己洞察を含めた自己の治療的役割に関して学ぶことが重要であると述べている。カンファレンスの記録から抽出された【自己洞察の重要性】については自らの看護介入やコミュニケーションの傾向を振り返ることについては述べられていたが、「治療的役割」についての記録はなかった。これは実習中に行われたプロセスレコード演習で、自らのコミュニケーションの傾向を振り返る機会があったことが学生の印

象に残ったためであると思われるが、振り返りだけではなく、自らの「治療的役割」にまで発展させることが精神看護学実習での学びを深めるために必要であると考えられる。

領域別実習は短い実習期間の中での実習である。その中で学生は解決できない事柄もあり、関りの困難さを乗り越える成功体験ばかりでなく、〈精神科患者との関わりの困難さ〉も経験する。しかし、記録内容からは達成できなかったこともなお、今後の課題として認識し、〈実習達成度と今後の課題〉として、他領域の実習や今後の学生自身の成長に生かそうとしていたと考えられた。太田ら（2012）は、精神看護学実習前後での困難さは、学びを深めたいというポジティブな感情にも結び付く可能性があるとして述べており、学生は困難さもなお今後の課題として肯定的にとらえられていたと考えられる。草地ら（2012）は、学生が体験を積み重ねることにより、実習課題以上の目的を達成していると述べており、実習での経験の積み重ねや今後の体験が学生にとっては必要であると考えられる。また、片岡ら（2005）が、学生が学びを深めるための教員側の学生への精神的・知的サポートを実施する必要性について述べているように、学生が、患者の変化に気づき課題ばかりに目を向けるのではなく、自らの関わりを肯定的にとらえられることができるように教員側の配慮が必要であると考えられる。

さらに、患者との直接的な関りの中での体験や学びばかりでなく、患者を取り巻く〈患者—看護師関係を通じた患者理解〉、〈治療・生活の場の理解〉、〈精神看護における看護師の在り方〉を学生は述べていた。学生は治療環境も精神看護の特徴として認識しており、これは、学生が患者の日常生活やプログラムに参加しながら、実際に精神科で看護を展開している看護師の姿や助言を受け、生活者としての患者を理解し、生活者という視点から精神看護の意義を学んでいたためであると思われる。このような〈看護師や他学生からの助言や患者を取り巻く治療環境から気付いた学び〉を得られたことは、〈学生自身の内面の変化や実習達成度を含めた体験からも学び〉として受持ち患者を中心とした関りから得た学びをより深めるものであったと考えられる。

しかし、久保園ら（2008）は、学生が有効な実習を行うために臨床指導者の役割が大きいものの、学生はその助言を処理しきれず、その後の看護に反映できていないことも多いと述べている。このことから、学生が多く学びが得られるように、臨床指導者と教員側の配慮が必要であるとともに、学生自身が、看護師からの助言を実際のケアに活かしていけるような工夫

も必要である。それは、学生自身が看護師から積極的に学ぶ姿勢や、学生間での意見を活発に交換することで問題解決を導き出すことであり、これは将来的に看護師として患者により質の高い看護を提供するためにも重要である。教員側も、患者選定については学生が短い実習期間の中で学びを深められるように考慮しているが、学生の多くは本実習で精神に障害のある人と初めて接することとなり、患者をイメージすることが難しく、ネガティブな感情を抱えて実習に臨むことが考えられる。学生が短い期間の中でもより多くの体験や学びが得られるように、実習導入時は特に安心感を与えるように配慮するとともに、病棟と教員の連携や、学生との密なコミュニケーションをとることが精神看護学実習において学生が学びを深める重要な要素であることが考えられた。さらに、近藤ら(2014)は、学生グループに焦点を当て、学生が力を発揮できるような教員の指導と学習環境の調整の重要性について述べている。学生が語る体験や学びの中でも、他学生からの影響を述べているように、実習グループを1つのチームとして捉え、学生間の特徴をとらえる指導も必要であると考えられる。

また、精神看護学実習において社会復帰施設での実習を取り入れているが、実習が1日であったためか、学生からの体験や学びはほとんど語られていなかった。精神看護学実習の場も、病院から地域へと拡大し、精神看護の役割やニーズも多様化しているため、今後は病院から地域への繋がりを意識できるような実習指導が必要であると考えられる。

VI. 実習指導への応用と今後の課題

実習グループのローテーションの関係から、各グループの特徴や、学生自身の学力のレベルを考慮した個別の対応が必要であり、偏りなく学生それぞれが有意義な実習での体験や学びが得られるような教員側の配慮が必要である。

また、本研究で使用したデータは学生の体験や学びを共有したカンファレンス記録であったが、学生が強く印象に残ったことが優先的に述べられていることが考えられる。学生が精神看護学実習での体験や学びを自由に語るができるように環境には配慮しているが、教員の前で発言していることから、評価を意識した発言であることも考えられる。以上のことから本研究は精神看護学実習における経験と学びのすべてを把握できたとは言いがたい。今後は、具体的な場面での学生の学びのプロセスを詳細に分析し、どのような要因が学生の学びを促進したか明らかにしていく必要が

ある。また、今回のデータは、カンファレンス記録だけであったが、さらに個人インタビューを加えるなど、複数のデータから、学生の体験や学びのありようがより詳細に明らかになるよう、継続的に研究を行っていく必要がある。

VII. 結論

1. 学生は精神看護学実習において《看護師や他学生からの助言や患者を取り巻く治療環境から気付いた学び》を得ており、この学びは、《学生自身の内面の変化や実習達成度を含めた体験からの学び》を深めていた。
2. 学生は実習終了時も精神科患者への対応の困難さを感じていたが、精神看護学実習での経験をその後の実習に生かしていきたいといった前向きな姿勢があり、達成できなかったこともなお学びとしてとらえていた。

VIII. 謝辞

本研究にご協力下さいました精神看護学実習を履修した学生の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 福山なおみ, 井上聡子 (2004): 精神科リハビリテーション看護における看護学生の学びの特徴, 川崎市立看護短期大学紀要9巻, 51-60.
- 舟島なをみ (1999): 質的研究への挑戦 (第2版), 35-53, 医学書院, 東京.
- 入澤友紀, 田村文子 (2003): 精神看護学実習における学生の「学び」の内容分析—感想文における患者—看護師の相互作用に参加しての「学び」—, 群馬県立医療短期大学紀要, 第10巻, 71-79.
- 和泉明子, 大沢たか子, 矢野智恵, 他 (2013): 臨地実習におけるカンファレンスの実態—教員のカンファレンス実施記録の分析を通して—, 高知学園短期大学紀要, 第43号, 47-57.
- 片岡三佳, 高橋香織 (2005): 精神看護学実習における受持ち患者との別れを通して看護学生が感じたこと, 岐阜県立看護大学紀要, 第6巻1号, 19-26.
- 近藤美也子, 井上 誠, 木村幸生, 他 (2014): 精神看護学実習における学生看護チームの受持ち患者の情報共有に影響する要因—受持ち患者共有記録用紙を用いて, 日本精神科看護学術集会誌, 57巻, 205-209.
- 久保園剛, 吉村昌幸, 下野義弘, 他 (2008): 精神看護学実習における看護学生の实習過程の評価「授業過程評価ス

- ケールー看護学実習用」による分析, 日本精神科看護学会誌, 51巻, 101-105.
- 草地仁史, 山根俊江, 磯村聡子, 他 (2012): 精神看護学演習における看護学生の学習内容の明確化—精神科看護師の活用によるロールプレイングの内容分析—, 第42回(平成23年度)日本看護学会論文集 精神看護, 42巻, 245-248.
- 西島聖子 (2008): 看護学生にとっての精神看護学実習でのカンファレンスの意義, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 看護教育研究集録 No.33, 108-114.
- 太田友子, 廣瀬春次, 水津達郎, 他 (2012): 精神看護学実習前後における看護大学性が精神科看護に対して抱く思いに関する分析, 山口県立大学学術情報, 第5号 [看護栄養学部紀要 通巻第5号], 1-10.
- 高橋香織, 片岡三佳 (2005): 精神看護学臨地実習終了後のレポート分析からみた学び, 岐阜県立看護大学紀要, 第6巻, 27-33.
- 武井麻子 (1997): 精神看護学実習で起こること カンファレンスの重要性, 看護教育, 38巻, 174-178.

要 旨

【目的】

本研究の目的は, 精神看護学実習での学生の体験と学びを明らかにすることである。

【方法】

本研究は三重大学大学院医学系研究科・医学部研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

研究のデータは, 2014年9月29日～2015年2月6日までA大学医学部附属病院精神・神経科病棟にて精神看護学実習を行った看護学生のうち, 研究への同意が得られた28名が行った16回分のカンファレンス記録を対象とし, 内容分析を行った。

【結果】

カンファレンス記録から抽出した学生の精神看護学実習中の学びや体験に関する記録単位は250であった。記録単位を意味内容の類似性に従い分類し, 内容の共通性から31のサブカテゴリを形成した。さらに内容の抽象度を増すため, 同様の作業を行い, 9つのカテゴリを形成した。学生の精神看護学実習の中での学びや体験は, 〈精神科患者との関わりの困難さ〉, 〈患者—看護学生間の実際の関りを通じた患者理解〉, 〈患者の意思を尊重した看護展開の必要性〉, 〈自己洞察の重要性〉, 〈関係の構築と発展〉, 〈実習達成度と今後の課題〉, 〈患者—看護師関係を通じた患者理解〉, 〈治療・生活の場の理解〉, 〈精神看護における看護師の在り方〉の9つに分類された。

【結論】

精神看護学実習における学生の体験と学びは, 実際の精神科病棟での患者や, 看護師との関りの中で多様に生じていた。

キーワード: 精神看護学実習, 体験, 学び